高　等　学　校

平成 30 年度

教育研究員研究報告書

外　国　語

東京都教育委員会

目　次

Ⅰ　研究主題設定の理由 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 1

Ⅱ　研究の視点 ・・ 1

Ⅲ　研究仮説 ・・・ 2

Ⅳ　研究方法 ・・・ 3

Ⅴ　研究内容 ・・・ 5

Ⅵ　研究の成果 ・・・ 20

Ⅶ　研究の課題 ・・・ 23

研究主題	社会的な話題について、論理的にやり取りできる力の育成 ～「やり取り」する力の評価の改善・充実を通して～

Ⅰ　研究主題設定の理由

近年のグローバル化の進展に伴い、我が国を取り巻く社会の構造が急激に変化しており、文化そのものにも影響を与えてきている。このような環境において、異文化理解や異文化コミュニケーションの重要性はますます高まってきている。特に国際共通語と言われている英語を通じて、基礎的・基本的な知識・技能を習得することはもちろんのこと、それらを主体的に活用し、課題を解決するために必要な思考力・判断力・表現力を育成することは生徒が今後未来を切り拓いていく上で非常に大切なことだと言える。

「グローバル人材育成戦略」（グローバル人材育成推進会議 審議まとめ　平成 24 年６月）では、「交渉レベル」の語学力をもつ人材が育成されることが重要であるとされている。また、「平成 29 年度英語教育改善のための英語力調査」（文部科学省）（以下「英語力調査」という。）で、「話すこと」の調査結果の得点が高い生徒ほど、「英語を使って、国際社会で活躍できるようになりたい」と回答する割合が高いことからも、グローバル人材の育成に向けて、「話すこと」の指導の更なる充実が必要である。また、「東京都教育ビジョン（第３次）」（東京都教育委員会　平成 25 年４月（平成 28 年４月　一部改定））では、「『使える英語』を習得させる実践的教育の推進」を主要施策に位置付け、「自らの考えや意見を論理的に説明したり、反論・説得したりすることができる能力を育成することが重要である。」と記載されており、日常会話にとどまらない「使える英語」を習得させることが求められている。これらを受け、「グローバル人材育成計画‘20」（東京都教育委員会　平成 30 年２月）では、教育の観点から東京の未来像を描き、「使える英語力の育成」に関する様々な施策を計画に位置付けている。

小学校高学年から外国語活動が必修となった生徒が高等学校に入学し、平成 32 年度には小学校中学年に外国語活動、高学年に教科としての外国語が必修となり、既に移行期間に入っていることからも、高等学校では今後さらに「話すこと」の力を伸長することが急務である。

Ⅱ　研究の視点

「英語教育実施状況調査」（平成 29 年度　文部科学省）によると、パフォーマンステストの実施率は、中学校ではほぼ 100％であるのに対し、高等学校では 63.5％となっている。また、科目の難易度が上がるにつれ、実施率が下がる傾向がある。高等学校学習指導要領（平成 29 年３月）では、４技能（「聞くこと」「読むこと」「話すこと」「書くこと」）のうち「話すこと」の領域として（やり取り）と（発表）の二つが設定されたが、英語力調査によると、ディベートやディスカッションをしていた生徒は 28.7%にとどまるなど、この「話すこと（やり取り）」の領域についての指導は十分とは言えない。

この領域についての指導を改善するため、次の三点を取り上げて研究を進めた。

(1)　「社会的な話題」を題材として、「やり取り」する言語活動を工夫すること。
(2)　「やり取り」を評価する評価項目（以下「ルーブリック」という。）を単元ごとに作成し、生徒に明示すること。
(3)　パフォーマンステストを生徒同士の「ペア形式」とすること。

高等学校学習指導要領解説外国語編・英語編（平成 30 年 7 月）では、「日常的な話題」と「社会的な話題」のそれぞれについて目標が設定されている。(1)で「社会的な話題」を取り上げたのは、「日常的な話題」についてのやり取りは、授業で多くみられるようになってきたが、「社会的な話題」については不十分と考えられるからである。このことは、ディベートコンテストに出場する学校が一部の学校に固定化されていることからも分かる。そこで、この研究を行うことで、多くの学校で論理的にやり取りができるようにしたいと考えた。

(2)を取り上げたのは、話した内容を重視した「話すこと（やり取り）」の能力を評価するルーブリックを作成し、このルーブリックを単元導入前に生徒に提示することで、目的意識をもって生徒に言語活動に取り組ませたいと考えたからである。これまで、パフォーマンステストのルーブリックは、発音やイントネーション、文法の正確さ、アイコンタクト等の項目が、話した内容に関する項目と同等に扱われることが多く、結果として内容に重点が置かれない傾向があった。そこで、単元を通して、文法の正確さを問う活動を実施した上で、文法事項をルーブリックに含めず、内容を重視することを生徒に明示することとした。その力を付けさせるための授業中の言語活動を工夫することを通して、生徒の「話すこと（やり取り）」の力の育成を図ることとした。

(3)で、パフォーマンステストを「ペア形式」としたのは、次の二つの理由からである。一つは、ペアワークは、通常の授業で積み重ねている活動であり、その授業中の活動と評価を関連付けることができるからである。もう一つは、教師と生徒のやり取りでは、インタビュー形式に近くなることが多いが、生徒同士のペア形式で行うことによって、対等な立場で会話しやすいという利点があるからである。ペアの組ませ方など配慮すべき事項はあるが、メリット・デメリットを明確にし、今後の検討材料とする上でも、このペア形式のパフォーマンステストを実施する意義は大きいと考えた。

Ⅲ　研究仮説

社会的な話題について、英語でやり取りする力に関するルーブリックを作成し、それに沿って指導・評価することで、生徒の論理的にやり取りできる力が育成されるだろう。

社会的な話題について、聞いたり読んだりしたことを基に、英語でやり取りできる力を育成するためには、系統立てて指導計画を組み立てる必要がある。そのために、評価項目を作成し、それに沿って指導・評価することで、確実な授業改善を進める必要がある。

本研究では、「日常的な話題」については、既に指導計画に位置付けられていることを前提として、「社会的な話題」に焦点を当て、授業改善を図った。また、評価については、到達度を測定することとした。

Ⅳ　研究方法

１　ルーブリックの設定

本研究では、社会的な話題について、「会話を継続させる力」や「根拠を示しながら自分の考えを伝える力」、「相手の発言を引き出す力」「キーワードを用いて一貫性のある発言ができる」など、やり取りの内容や、やり取りそのものの能力に関する評価項目に絞り込み、文法事項を項目に含めずに評価するルーブリックを設定した。授業でこのルーブリックに沿った活動を行うことで、生徒はやり取りする力を意識しながら活動に取り組むことができると考えた。

年間のルーブリックは以下のとおりとし、検証授業では各学校の実情に合わせ単元ごとにルーブリックを設定することとした。

評価項目	評価規準	評価
Length	２分間沈黙せず相手とやり取りを続けられる。	３・２・１・０
Interactive Communication	自分の意見を示しながら、相手の意見を引き出せる。	３・２・１・０
Contents / Cohesion	論理的な発言ができる。 一貫性をもった内容を話せる。	３・２・１・０

２　やり取りを取り入れた授業の実践

授業時間内の主に最初の５分から 10 分程度の時間を利用して、教科書の各単元の内容に関連のある社会的な話題について、聞いたり読んだりしたことを基に、ペアでやり取りする活動をほぼ毎時間設定した。また、段階的に指導するため、以下のような活動を生徒の実態に合わせて組み合わせて行うこととした。

○　例となる定型文の空欄を埋めながらやり取りを完成させる練習
○　会話の内容を深めるため、質問する力を高める練習
○　根拠を示しながら自分の意見を伝える練習
○　異なる立場からの意見を聞き、自分の考えを伝える練習
○　相手の発言を引き出すための表現の練習
○　途切れてしまったやり取りを再開するための表現の練習
○　キーワードを用いて一貫性のある発言をする練習

３　パフォーマンステストの実施と教師による評価

パフォーマンステストのテーマは、教科書の単元で扱った内容に関連した社会的な話題とし、そのテーマに沿ったやり取りを評価することとした。パフォーマンステストの評価は、学期末や年度末に主に行うが、通常の授業から観察による評価を行い、不足していると思われる力を次時の授業で重点的に指導するなど、PDCA サイクルを構築するとともに、フィードバックをクラス全体に行った。また、ルーブリックを活用した生徒同士による評価を授業中に行うことによって、スモールステップで力を育成できるよう工夫をした。

4　仮説の検証

(1)　生徒の意識の変容

教師の評価をフィードバックした後、「社会的な話題について、論理的にやり取りする力」に関しての意識調査を、一単元の終了後又は一単元の前後にアンケート形式で行う。

〔質問１〕　あなたは、英語での「やり取り」をすることは大切だと思いますか。
〔質問２〕　あなたは英語で何とか「やり取り」を続けられると思いますか。
〔質問３〕　自分の意見を何とか英語で相手に伝えることはできると思いますか。
〔質問４〕　相手の意見を聞いて、英語で何とか質問をすることができると思いますか。
〔質問５〕　相手の意見を聞いて、さらに自分の意見を何とか英語で言うことができると思いますか。
〔質問６〕　相手が黙ってしまった時、相手の意見を英語で引き出すことができると思いますか。
〔質問７〕　英語でやり取りを行う中で、相手の意見にリアクションをとるなど、積極的に聞くようにしていますか。
＜以降は、単元の学習後のみの質問＞
〔質問８〕　事前に示したルーブリック（評価項目）は役に立ちましたか。
〔質問９〕　どの練習が「やり取り」の活動を行う際に役に立ちましたか。
〔質問 10〕　英語で「やり取り」をすることに対する抵抗感（ハードル）は下がったと思いますか。
〔質問 11〕　パフォーマンステストがペアになったことで、ペアワークの取組に対する意識は変わったと思いますか。

(2)　パフォーマンステストの評価の分析

パフォーマンステストの教師による評価から、生徒の「社会的な話題について、論理的にやり取りする力」の向上について分析した。

Ⅴ　研究内容

全体テーマ「『主体的・対話的で深い学び』の実現に向けた授業改善」

高校部会テーマ
「これからの時代に求められる『資質・能力』を育むための授業改善と学習評価の充実」

各教科等における「資質・能力」について
１（知識及び技能）目的や場面・状況などに応じて、外国語の適切な語彙や表現などを活用する技能
２（思考力、判断力、表現力等）目的や場面・状況、相手の反応などに応じて、外国語でやり取りできる能力
３（学びに向かう力、人間性等）諸外国の文化に対する理解を深め、相手に配慮しながら主体的・自律的に外国語を用いてコミュニケーションを図ろうとする態度

高校部会テーマにおける現状と課題
【現状】４技能のうち「話すこと」に関しての日常的な話題でのやり取りについては、概ね多くの学校の授業において実施され始めているが、社会的な話題でのやり取りは一部に限られている。また、やり取りの活動に関しての教師の評価が生徒にフィードバックされていない。
【課題】社会的な話題についての「話すこと（やり取り）」の技能に関して、教師が評価することを通して、教師自身が授業改善のポイントを認識し、生徒の「話すこと（やり取り）」の力を育成する必要がある。
【テーマ設定のための着眼点】教師が生徒のやり取りを評価するためのルーブリックに着目する。また、パフォーマンステストの形式を生徒同士の「ペア形式」とする。

高等学校外国語部会

社会的な話題について、論理的にやり取りできる力の育成
～「やり取り」する力の評価の改善・充実を通して～

仮　　説
社会的な話題について、英語でやり取りする力に関するルーブリックを作成し、それに沿って指導・評価することで、生徒の論理的にやり取りできる力が育成されるだろう。

具体的方策
１　目的を意識して活動に取り組むことができるよう、ルーブリック（評価項目）を設定し、単元の最初に生徒に明示する。
２　英語で社会的な話題について論理的にやり取りするために必要な活動を段階的に授業で行う。
３　生徒同士をペアにしてパフォーマンステストを行い、ルーブリックを基に教師が評価を行う。

検証方法
１　「社会的な話題について、論理的にやり取りする力」に関しての生徒の意識調査（アンケート）を行う。
２　パフォーマンステストの教師による評価から、生徒の「社会的な話題について、論理的にやり取りする力」の向上について分析する。

1　先行事例等研究

本研究では、以下の先行事例等を参考にしながら、学校で実現可能なパフォーマンステストのルーブリックを作成し、検証授業を行った。

(1)　ケンブリッジ英検

ペアでのスピーキングテストを実施している。この試験のうち、中高生対象 Preliminary for Schools の評価項目は、以下の４項目となっている。

ア　発音

イ　文法・語彙

ウ　双方向コミュニケーション

・積極的な会話の展開

・会話のイニシアチブ、相手の発言への対応

・相手の発言を引き出すスキル

・会話の基本：発話・応答の役割

エ　談話マネージメント

・話す内容に論理的かつ首尾一貫性が見られるか。

・関連性があるか。

・同じアイディアの繰り返しではなく、トピックを発展させる新しいアイディアの導入はあるか。

(2)　「英語インターラクティブフォーラム」（茨城県）

出場者が３名のグループにランダムに振り分けられ、与えられたテーマについて５分間会話を行い、個人のパフォーマンスを審査員が「内容」「表現」「協調性のある親しみやすい態度」の３観点から審査するコンテストである。

2　検証授業の実施

社会的な話題について論理的にやり取りする力を育成するため、第２学期中を通して、段階的に指導することとした。また、第２学期末にパフォーマンステストを行い、生徒の学習状況を評価することとした。

第２学期始め （検証授業１）	第２学期中頃 （検証授業２）	第２学期末 （検証授業３）
・社会的な話題についての「やり取り」に慣れる。 **・定型表現の空欄を埋めながらやり取りを完成させる。**	**・会話の内容を深めるため、質問する力を高める。** **・根拠を示しながら自分の意見を伝える。**	・異なる立場からの意見を聞き、自分の考えを伝える。 ・相手の発言を引き出す。 **・途切れてしまったやり取りを再開する。**

上記の表中では、検証授業の「本時の目標」に含まれた項目を太字で示している。また、以降の検証授業の指導案等では、「やり取り」に関する活動の部分に下線を引いて示している。

３　検証授業１

「定型表現の空欄を埋めながらやり取りを完成させる。」

(1)　単元のルーブリック（生徒相互評価用）

評価項目＼評価	３	２	１	０
会話の長さ	２分間会話を 10 数秒程度の沈黙があるものの、続けられる。	合計 30 秒程度までの沈黙があるが、２分間会話を続けられる。	合計 50 秒程度までの沈黙があるが、２分間会話を続けられる。	２分間の会話の半分以上が沈黙である。
定型表現を使ったやり取り	相手の意見を引き出し、自分の意見を理由とともに示すことができる。	相手の意見を上手く引き出せないが、自分の意見を理由とともに示すことができる。	相手の意見を上手く引き出せないが、自分の意見を示すことができる。	自分の意見を示すことができない。

(2)　*Lesson 6　El Sistema: The Miracle of Music*

UNICORN　English Communication Ⅰ NEW EDITION（文英堂）

本単元は「エル・システマ」というヴェネズエラで行われている教育システム、「無償で楽器を貸し与え、音楽を教えるという音楽による青少年育成」を取り上げている。

(3)　単元の指導（８時間扱い）

時間	学習活動
第１時（本時）	・スピーキング活動・テストの説明 ・ルーブリックの説明 ・帯活動　テーマについて定型表現を使って２分間やり取りを続ける（日・英）。 ・Part１の導入
第２時	・帯活動　同テーマで、パートナーを替えて２分間やり取りを続ける。 ・Part１の内容理解　・単語テスト
第３時	・帯活動　同テーマで、パートナーを替えて２分間やり取りを続ける。必ず相手に一度は質問をする。 ・Part２の内容理解
第４時	・Part２の内容理解

	学習活動
第５時	・Part３の導入 ・単語テスト
第６時	・帯活動　Part３を踏まえ、相手の My favorite を聞き質問をする。 ・Part３の内容理解
第７時	・帯活動　同じ活動をパートナーを替えて行う。 ・Part４の導入
第８時	・帯活動　同じ活動をパートナーを替えて行う。 ・Part４の内容理解、単元の振り返り

※第３学期末にパフォーマンステストを実施

(4) 本時（全８時間中の１時間目）

ア　本時の目標

(ｱ)　ヴェネズエラについての知識を英語で理解する。

(ｲ)　エル・システマがどのような組織であるか、また、創立者はどのような人物であったのかを読み取り、理解する。

(ｳ)　「音楽は私たちの生活に必要か」についてのテーマを使用し、ペアで与えられた定型表現を使って、会話を２分間続けられるようにする。

イ　本時の展開

時間	学習内容・学習活動	指導上の留意点
１分	・挨拶 ・スピーキング活動・テストの説明を受ける。 ・ルーブリックの内容を理解する。	
導　入 15分	「やり取り」の活動の練習を行う。 ・ワークシートを活用し、やり取り活動の内容目標を理解する。　ルーブリックを理解する。 ・「音楽は生活に必要である」「音楽は生活に必要でない」に分かれて、理由と意見を述べつつ、相手を説得する練習をする（日本語）。 ・上の内容について定型表現を使って英語で行う。	英語で行う時は、あらかじめ与えた表現を利用し、会話を続けさせる。 日本語で練習する前に少し考える時間を与え、２分間話し続けるように促す。 空欄のある定型文を示し、必要な内容を入れながら話すよう促す。
展開１ 11分	ヴェネズエラについての背景知識を理解する。 Part１の単語、イディオムを確認する。	ICT を使用し、簡潔に行う。 ペアワークで繰り返し発音、確認させる。
展開２ 18分	・Part１の内容に関する英問に英語で答える。 ・概要を確認する。 ・音読する。	宿題をペアで確認させる。 予習の段階で、内容が理解できているか確認する。
まとめ ５分	・本時を振り返る。 ・次回の内容について予告を聞く。	帯活動の続きを行い、音読練習、予習ノートのチェックをすることを伝える。

(5)　「やり取り」に関する活動の手順

第１時に、①数分間の帯活動の時間を設けてやり取りの練習をすること、②パフォーマンステストで使用するルーブリック（p.14　Ⅲ５「検証授業３」に掲載）及び本時のルーブリックを示した。また、３学期末のパフォーマンステストについて説明した。

あわせて、本単元のテーマに合わせ、「音楽は自分の生活に A『必要である』、B『必要でない』」に分かれ、定型表現を使って相手の意見を聞き、自分の意見を伝える練習を次ページのワークシートを活用して行った。

＜ワークシート（抜粋）＞

Music is Necessary for our Life.

Useful Expressions

A: I agree/disagree that ~ because…　　/ I think/don't think that ~ because…

B: I see it differently. _____.

I see your point, but _____.

That may be true, but _____.

1　準備時間　１分

2　「音楽は生活に必要か否か」を日本語で２分間やり取りする。

3　上記の内容を、Useful Expressions を使って、２分間英語でやり取りする。

英語でのやり取りの前に、最初は、「日本語」で２分間やり取りをする練習を行った。生徒は、日本語でも２分間会話を続けることは、容易ではないと感じたようであり、教師は、生徒に自分の意見をしっかり述べられないと会話が続かないということを実感させることができた。また、日本語で自分の考えを深め、相手の意見を把握した上で、英語のやり取りに取り組ませたことで、生徒は Useful Expressions という決められた型による英語表現であっても、内容のある会話を継続することができた。

(6)　社会的な話題について論理的に「やり取り」する力の育成に関しての振り返り

決められた型を用いて会話を継続する練習は、検証授業後の授業でも扱い、計３回行った。活動に選んだテーマがやや答えにくかったこともあり、同じテーマで、繰り返し活動させることによって、考えを深めさせ、適切な応答の仕方を学ばせることができた。始めは一方的な会話になったり、沈黙が続いたりしたペアもあったが、第３回ではこの活動に慣れ、スムーズなやり取りができるようになった生徒が増加した。

活動後は、以下のような振り返りシートより、毎回の活動記録を残すようにし、各自で振り返りができるようにした。このことによって、生徒たちは自らの「やり取りの技術」の伸長度合や、自分の課題を容易に把握することができるようになった。

＜振り返りワークシート（抜粋）＞

Date	Partner	Activities	Useful Expressions	Comment
練習した日付を書く。	ペアの名前を書く。	その日の活動概要を書く。	その日に学んだ重要表現や使用した表現を書く。	自己評価する。

(7)　考察

ア　ルーブリックによる評価

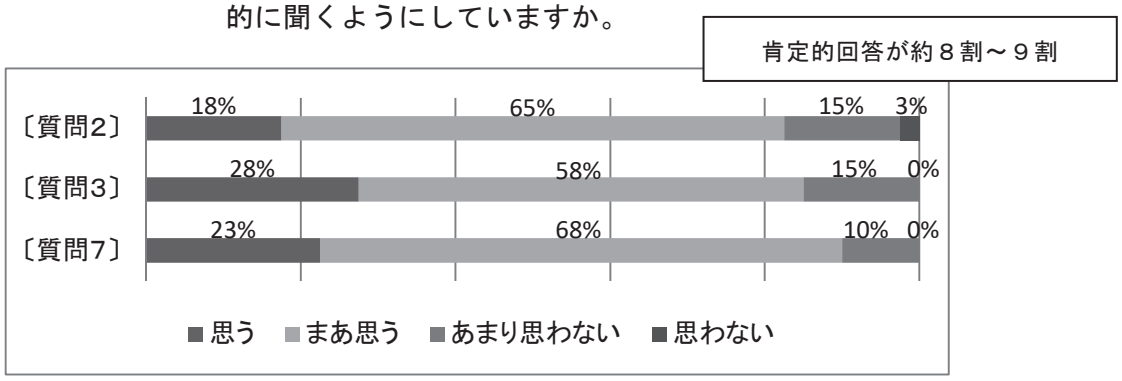
指導の過程では、本単元のルーブリックを用いて、生徒同士の相互評価を行った。今回の活動においては目標設定を比較的容易なものとしたため、「会話の長さ」に関しては、１、２回の練習で評価が上の段階に進む生徒が多かった。「定型表現を使ったやり取り」についても、最初から０に相当する生徒はほとんどおらず、多くの生徒は２又は１の段階からスタートできていた。ルーブリックを示すことによって、生徒は自分のやり取りする力の伸長を実感することができていた。

イ　単元指導後の生徒の意識調査結果　＜質問２、３、７＞（回答数 40 名）

〔質問２〕　あなたは英語で何とか「やり取り」を続けられると思いますか。

〔質問３〕　自分の意見を何とか英語で相手に伝えることはできると思いますか。

〔質問７〕　英語でやり取りを行う中で、相手の意見にリアクションをとるなど、積極的に聞くようにしていますか。



元々ペアワークを厭わない生徒が多く、活動に積極的に取り組んだ様子がうかがえる。「自分の意見を何とか英語で相手に伝えることができた」という質問では、肯定的回答が８割を超え、「思わない」という回答は０％である。「英語で何とかやり取りが続けられた」に対する肯定的回答も８割超ではあるが、「思う」という回答が「意見を伝えることができた」という質問よりも少ない。このことから、意見を伝えることはできるが、やり取りには自信がない様子がうかがえる。

アンケートの自由意見欄では、「ボキャブラリーがなく英語にするのが難しい。」、「何を話したらよいのか迷う。」などの記述があった。やり取りの型を与えることに加え、テーマについての基礎知識などのインプットや自分の意見を考えさせることの重要性を改めて認識した。

ウ　今後の課題

ルーブリックについて、生徒の能力に合った設定をすることが難しかった。今後パフォーマンステストを重ねていくことで、目標の設定をより適切なものにしていきたい。

また、題材によって会話の継続や内容に大きな差があることから、やり取りを行う題材ついても、多様な意見が見込める題材を蓄積していきたい。

４　検証授業２

「会話を発展させる質問をする。」「根拠を示しながら自分の意見を伝える。」

(1)　本時のルーブリック（生徒相互評価用）

評価項目＼評価	5 (Excellent)	4 (Very Good)	3 (Good)	2 (Fair)	1 (Poor)
英語で質問ができた数	５つ以上	４つ以上	３つ以上	２つ以上	１つ以下

(2)　*Lesson7 "Why Biomimicry?"* CROWN English Communication Ⅱ(三省堂)

バイオミミクリー(自然のデザインや仕組を実際の技術や製品に生かす研究や方法論を表す語）の概要及び今後の可能性を取り上げている。

(3)　単元の指導計画と評価計画（５時間扱い）

時間	学習活動
第1時（本時）	・本単元の学習内容と目標の把握 Part 1 ・音読活動 ・帯活動 Creating Questions ・内容理解 ・ペアで根拠を示しながら意見交換
第2時	Part 2 ・音読活動 ・帯活動 Creating Questions ・キーワードを用いた意見交換 ・本文に関連したトピックで意見交換
第3時	Part 3 ・音読活動 ・帯活動 Creating Questions ・キーワード等に対して意見を述べる。 ・本文に関連したトピックで意見交換

	学習活動
第4時	Part 4 ・音読活動 ・帯活動 Creating Questions ・写真に対して意見を述べる。 ・本文に関連したトピックで意見交換
第5時	・単元に関する英問英答 ・ワークシート（文法） ・キーワードを用いた要約文の発表

※第２学期末にパフォーマンステストを実施

(4)　本時（全５時間中の第１時間目）

ア　本時の目標

(ｱ)　本文を読んで、できるだけ多くの質問を考えることができる。

(ｲ)　ペアワークにおいて、できるだけ多くの質問をすることができる。

(ｳ)　ペアワークにおいて、根拠を示し論理的な発言をすることができる。

イ　本時の展開

時間	学習内容・学習活動	指導上の留意点
導入 10分	・本単元の学習内容と目標を把握する。 ・本時のポイントを確認する。 ・Creating Questions「Photo Language」 ①英語の質問を続けて、黒板に隠された写真をペアで当てる。 ②生徒Aがヒントとなる１語を生徒Bに与える。生徒Bはできるだけ多くの質問をして写真を当てる。役割を交代して、再度活動を行う。	・本時の目標を示す。 ・時間内にできるだけ多くの質問を考えさせる。 ・「生命」「模倣」のキーワードに触れさせる。 ・バイオミミクリーの具体例（ハスの葉→超撥水性）となる画像を見せて、イメージをもたせる。
展開１ 15分	・新出単語を音読する。 ・本文を音読する。 （CDの後について音読する。ペアで音読する。）	・個々の子音、母音、イントネーションに注意させる。 ・意味のかたまりを意識させる。 ・ペアワークで細部まで確認しながら音読させる。
展開２ 12分	・ペアワーク①　質問作りＱ＆Ａ ・本文に関連する質問をできるだけ多く作る。 ・パートナーと交換。相手の質問文に書いて答える。	・質問文を５つ以上考えることを目標にする。Ex: What are the advantages and disadvantages of technology? ・パートナーの質問数をワークシートに記入させる。
展開３ ８分	・ルーブリックの説明を受ける。 ・ペアワーク②　意見交換 ・本文に関連する問い　“What can animals or insects do that people cannot? Discuss and find at least one example.”に対して２分間意見交換をする。	・根拠を示し、意見を述べさせる。 ・発言者が話しやすくなるよう、聴く人は相づちを打つ。 ・自分がもつ疑問が将来、発明となる可能性があることに気付かせる。　Ex: Birds can fly in the sky and travel anywhere.
まとめ ５分	・振り返り	・本時の授業の学習内容を再確認する。

(5)　「やり取り」に関する活動の手順

ア　質問作りＱ＆Ａ

本文に関する質問を各自で作る。（本時では、２分間で５つ以上の質問作成を目標にした。）その後、複数回、ペアでＱ＆Ａを行う。１人目とは紙に書いて交換（writing）し解答を書く。二人目以降は口頭で行う（speaking, listening）。

イ　意見交換

本文理解を深める活動として、“What can animals or insects do that people cannot？”について自分の意見を考え、生徒二人で最低一つのアイディアを出す。

ペアワークの際には、話し手が話しやすくなるように聴き手が相づちを打つように促した。テーマは社会的でありながら、生徒が話しやすいテーマを設定した。テーマの設定の際には、教師が一人で考えるのではなく、JET 等と実際に質問を出し合って決定した。

(6)　社会的な話題について論理的に「やり取り」する力の育成に関しての振り返り

教師が「明確な目標」「達成するためのヒント」「答えのヒントとなるキーワード」を与えることによって、生徒の活動は積極的になった。最初は、具体的な分量や時間を目標とさせた。数回は「分量」「続けること」に集中させた。次の段階では、キーワードを示し、自分の主張に「事実やデータ等といった根拠」を必ず含める活動を継続した。こうした段階的な指導により、論理的な「やり取り」をある程度の時間、継続させる力が付いた。

(7)　考察

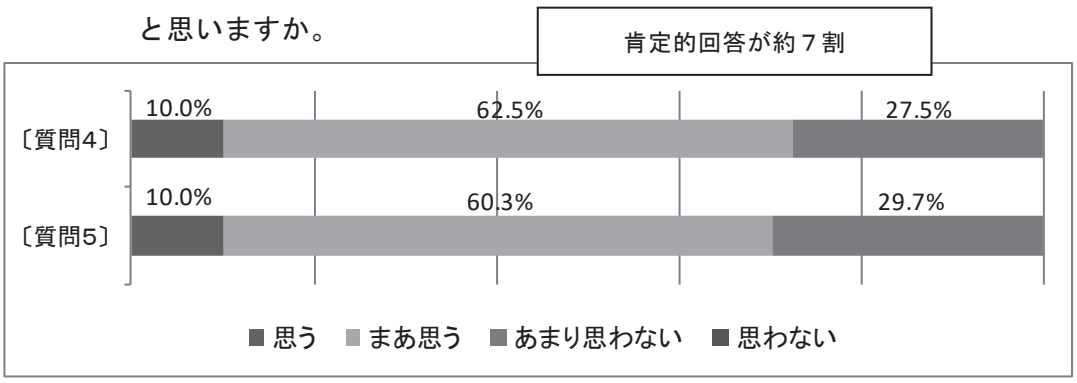
ア　ルーブリックによる評価

生徒達はルーブリックを活用することによって、自分の活動を振り返ることができた。また、生徒同士で評価をさせた際、「他の生徒を評価することによって、ルーブリックに示された目標や基準を理解することができた」という声もあった。

イ　指導後の生徒の意識調査結果＜質問４、５、９＞

〔質問４〕　相手の意見を聞いて、英語で何とか質問をすることができると思いますか。

〔質問５〕　相手の意見を聞いて、さらに自分の意見を何とか英語で言うことができると思いますか。



約７割の生徒が、自身の「質問をする力」「意見を言う力」が向上したと感じていた。また、「思わない」と回答した生徒は０％であった。

〔質問９〕どの練習が「やり取り」の活動を行う際に役立ちましたか。

- 質問を多く作る練習
- 根拠を示しながら意見を述べる練習
- 相づちを打つ練習
- その他（トピックについて話し合う活動、JET や ALT の先生と話す活動等）

これらの結果から、単元の中で重点を置いた活動は、生徒の「やり取り」する力の育成に有効であることが分かった。

ウ　課題

本単元では、「質問を作る」活動において、数量に着目して指導を行った。生徒のワークシートでは、What や How を使用して作る生徒が多く、本文を読めばすぐに解答の出せる質問が多かった。会話を発展させるための質問や、書き手の意図を問う質問を考えさせるなど、状況や場面に応じた質問ができるよう、指導の改善・充実を図りたい。

５　検証授業３

「途切れてしまったやり取りを再開する。」「パフォーマンステスト」

(1)　単元のルーブリック（教師評価用を生徒に明示）

	3　Excellent	2　Good	1　Fair	0　Unacceptable
Length	The conversation lasts for 2 minutes, with little silence.	The conversation lasts for 2 minutes, with some silence.	The test taker is often silent for 10 seconds but tries to maintain the conversation for 2 minutes.	The test taker is always silent for a long time.
Interactive Communication	The test taker responds to their partner with their opinion(s), and at the same time, elicits their partner's opinion(s).	The test taker responds to their partner with their opinion(s), but can't elicit their partner's opinion(s) well.	The test taker hardly responds to their partner with their opinion(s), and can't elicit their partner's opinion(s).	The test taker is unable to respond.
Contents /Cohesion	The test taker clearly expresses their opinion(s) on the article and gives an/some effective reason(s).	The test taker expresses their opinion(s) on the article and gives a/some reason(s).	The test taker expresses their opinion(s) on the article, but is unable to give an/some effective reason(s).	The test taker is unable to express their opinion(s) on the article and lacks cohesion.

★Grammatical error is NOT an evaluation point!

Theme
① Living from day to day
② Living a scheduled day

Your Own Reflection

このルーブリックは、パフォーマンステストを実施する際に教師が使用した。文法事項が評価項目に入らないことを明記するとともに、すぐに生徒が自身のパフォーマンスの振り返りができるように、テスト後その場で教師が評価を記入し、生徒に返却した。

(2)　*Lesson 11　“ A Nomad's Life ”*

SKILLFUL English Communication Ⅲ　（啓林館）

アフリカと欧米の時間感覚を比較した随筆文である。ソマリアでは、スケジュールや時計、カレンダーといった時間の概念がない生活を送っていた筆者が読者に伝えたいことを掴む。

(3)　単元（題材）の指導（５時間扱い）

時間	学習活動
第1時	・本文導入 ① No stress but no electric items. ②Some stress but having electric items. ・New Words ・Part 1 「過去のことに多くの時間を費やさない。全ては今日につながっている。」
第2時	・Part２ 「欧米世界とは違った時間の見方」 ・Part３ 「誕生日も重要でない。季節や太陽に従って生きる。」 ・ミニディベート 「時間の概念は大切か？」
第3時	・Part４ 「一日の計画をその日に立てる生活と予定表で既に決まっている生活」 ・各利点を考える。

	学習活動
第4時	・内容に関するＱ＆Ａ ・パフォーマンステストのテーマの提示、ペアでの練習 ・全体の復習
第5時（本時）	・トラブルシューティングを学ぶ ・パフォーマンステスト 「その日暮らしの生活と予定の決まった生活」の各利点を考える。 →自身のパートナーと英語で意見交換をし、それを教師が採点する。

(4)　本時（全５時間中の５時間目）

ア　本時の目標

(ｱ)　与えられたテーマに関して、相手の意見を聞き、自分の意見をその根拠を踏まえて相手に伝えることができる。

(ｲ)　途切れてしまったやり取りを再開することができる。

イ　本時の展開

	学習内容・学習活動	指導上の留意点
導　入 5分	・挨拶（2 mins） ・復習　本文音読(3 mins)	・本文全文ではなく、本文の内容を包括する部分について音読する。
展　開 40 分	・トラブルシューティングの練習 Pair Practice（5 mins） 相手の発話が止まった時の対応を学ぶ。	・相手が会話に困ってしまった場面を設定し、ペアで練習する。
	・パフォーマンステスト(35 mins) ペアでディベート形式で行う。 テーマ 「その日暮らしの生活より予定の決まった生活の方がよい」)	・JET と JTE の二人で評価する。 ・呼び出しの順番は決めておくが、生徒には直前まで知らせない。 ・Feedback のプリントを評価後すぐに渡し、生徒に振り返りをさせる。 ・教室内に残っている生徒は、「論理の一貫性をもたせた」ライティング活動を行わせる(ディスコースマーカーを使用させる）。
まとめ 5 分	・Feedback（2 mins） 教師からの全体への Feedback ・模範生徒の実演（3 mins）	・模範生徒のパフォーマンスを全体に示すことで、他の生徒の学びを深める。

(5)　「やり取り」に関する活動の手順

ア　途切れてしまったやり取りを再開するための問題解決手段（トラブルシューティング）の練習

生徒同士で会話の練習をする際に止まってしまうことが多く、その部分を克服しなければならないという課題があった。そのため、会話が止まった時の問題解決手段を載せたワークシートを作成して、生徒同士のやり取りが続くようにした。

＜ワークシート＞

If your partner stops talking, you can try one of the followings.

①　Give some examples or elicit your partner’s example.

For example, … / What do you mean? / What is the example? / Is that …?

②　Give some responses.

I see. / Right. / That’s true. / Really? / I think so, too. / Exactly. / Me, too. / That’s interesting. /

③　Repeat your partner’s words mechanically.

You said ～, but —. （Ｅｘ）　A: I went to Hokkaido two months ago. B: Oh, you went to Hokkaido!

④　Ask for more information.

Do you really want to do ～? /

⑤　Ask more questions.

One more thing …. / In addition, …. / （Ｅｘ）A: I went to an amusement park last Sunday. Um… B: Who did you go with?　Did you ride a roller coaster?

イ　二人一組で社会的な内容に関して「やり取り」を行うパフォーマンステスト

クラスを大きく二つのグループに分け、JET と日本人教師がそれぞれに分かれて二人一組のペアを採点していくことで時間の短縮を図り、1 時間のうちに 40 人全ての生徒の採点を行った。ペアはあらかじめ教師の方でランダムに設定したが、生徒には当日二人ずつ名前を読んでテストの場所に誘導した。単元を通して、根拠を示しながら意見を述べる練習やミニディベートを行う際に、二つの異なる立場からの意見を考える練習も行った。さらにテストに向けては、自分の意見に関して、原稿ではなくメモを作成させた。原稿を読んだり、暗唱したりするのではなく、キーワードなどを基に自分の言葉で話すように指導した。

さらに、待機中及びパフォーマンステストを終了した生徒には本単元に関するライティング活動を与えて、テスト時間以外にも常に単元に関する活動を行うようにさせた。

(6)　社会的な話題について論理的に「やり取り」する力の育成に関しての振り返り

ディベートの際に、生徒に必ず必要なものは、やり取りの活動をするための「型」とその話題に対する事前知識である。まず、型を示すために様々な活動を通じて、何度かやり取りの練習をしてきたが、最終段階ではトラブルシューティングの練習も取り入れた。生徒は、ある程度のやり取りの仕方を理解した後であっても、相手とのやり取りに詰まった際に、次に何を話したらよいのかが分からないという場面が多く見受けられた。そのため、やり取りに困った際に役に立つ表現を示すことで、生徒のやり取りが続くようにした。

また、その話題に対する知識を増やすために、日々の教科書を使った授業でも背景知識などを増やし、ディベートを行う前には最低 10 個はその話題についての利点と欠点を挙げさせ、話をする準備をしてから行うようにした。

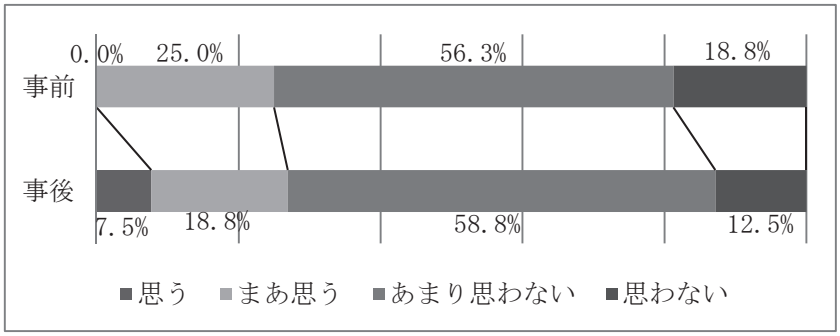
(7)　考察

ア　ルーブリックによる評価

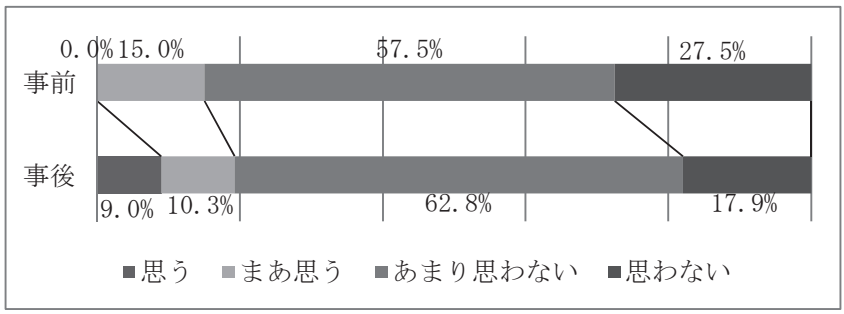
生徒にはルーブリックを事前に示している。その結果、どのような視点で教師によって評価されるのかが明確となり、生徒もその点を意識して練習をしていた。また、文法上の誤りは採点結果に影響しないということを生徒に伝えることで、誤りを恐れる様子が見受けられなかった。

イ　生徒の意識調査結果＜アンケート項目５、６、９＞（回答数 80 名）

〔質問５〕相手の意見を聞いて、さらに自分の意見を何とか英語で言うことができると思いますか。



〔質問６〕相手が黙ってしまった時、相手の意見を英語で引き出すことができると思いますか。



これら二つの結果の特徴は「思う」と回答した生徒が０％から大きく伸びていること、また、「思わない」と回答した生徒が減少していることである。「まあ思う」と回答した生徒が、授業での活動を通じて短期間で自信をもつことができていること、「思わない」すなわち「できない」と断言する生徒の割合が減っていることから、「やり取り」に関する活動は有効であったと考えられる。

〔質問９〕どの練習が「やり取り」の活動を行う際に役に立ちましたか。

以下の二つが圧倒的に高い数値を示した。

・Fast Food vs Japanese Food の対話 ・キーワードを 10 個挙げてからの対話

以前の単元で行った「Fast Food vs Japanese Food」の対話は、複数回使用したことがある題材であり、今単元でも導入で使用した。その際、生徒同士で相互評価をさせたが、ルーブリックを活用して「話す内容」を生徒同士で実際に評価したことにより、やり取りに関する理解が深まり、活動の充実が図られたのではないかと推察できる。

６　部員の所属校での取組

生徒のパフォーマンスに対する振り返りは、早ければ早いほど生徒の意欲が高まると言われている。生徒同士の相互評価や自己評価については、ルーブリックを用いて生徒が評価を行い、ペアワーク等で確認することができる。以下の事例は、部員における所属校での生徒の相互評価の活動についての工夫例である。１人の生徒がペアのやり取りを評価するために、３人のグループになり活動を行っている。

＜手順＞

１　３人組のグループを作る。

２　３人に役割を決める。

・Speaker　・Listener　・Evaluator

３　Speaker は、１分間のモノローグをする。

４　Listener は、相づちを打ちながらそのモノローグを聞き、質問を考える。

５　１分間の質疑応答を行う。

６　Evaluator は、ルーブリックを用いて、Listener の評価をする。

７　役割を交代して、３回行う。

Ⅵ　研究の成果

１　パフォーマンステストの評価の分析

ルーブリックで示す三つの評価項目
「Length」「Interactive Communication」「Contents / Cohesion」について
⇒70％の生徒が「３ Excellent」と「２ Good」の評価を獲得

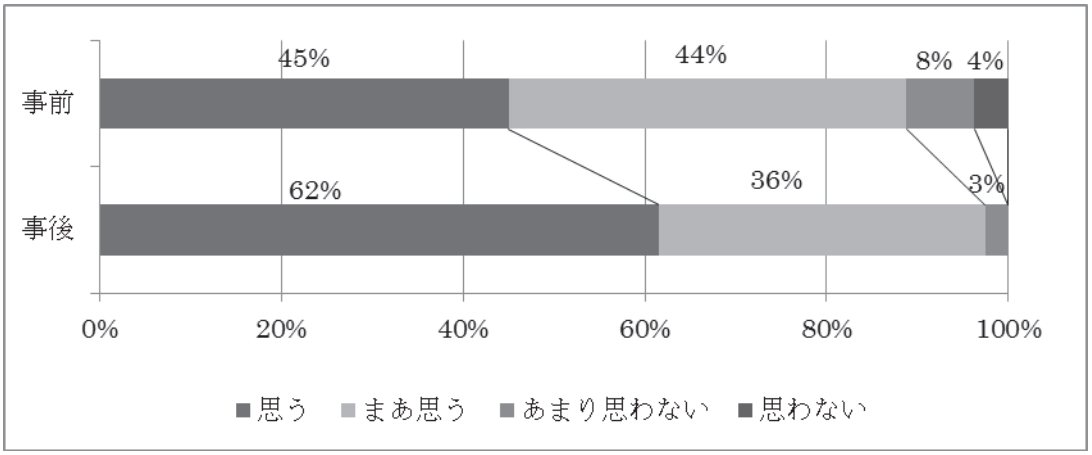
このパフォーマンステストに向けて、いくつかのスモールステップを設定し、授業の中のペアワークなどで練習してきた。初めのうちは、どのようにしてやり取りをしたらいいか分からない生徒がいたため、例文を示したり、穴埋め形式でやり取りを完成させたりするなどの練習に取り組んだ。また、一つのテーマについてできるだけたくさんの質問をする練習や、質問に対して根拠をもって論理的に答える練習、論理的に答えることができなくなった相手から意見を引き出すための練習、やり取りが途切れてしまったときに、会話を再開させる練習などのプロセスを踏んで、社会的な話題について、論理的にやり取りをするという経験を積み重ねた。これらのことが、高得点につながったと考えることができる。

また、パフォーマンステストでは、文法的な誤りを恐れず積極的にやり取りをしようとする生徒の様子が見られた。

２　生徒の「やり取り」に関する意識について

＜意識調査結果＞
〔質問１〕あなたは、英語での「やり取り」をすることは大切だと思いますか。
⇒各校とも肯定的回答が９割程度の数値を示した。

検証授業１及び２の学校での単元後の生徒の意識調査では、肯定的回答が９割を超える結果となった。検証授業３では、単元前後に意識調査を実施し、結果は以下のとおりとなった。



また、理由として自由記述欄に生徒から以下の記載があった。

＜理由（自由記述）＞
・グローバル化が進み、今後、海外の人達と話す機会も増えるから。
・英語は会話手段の一つであり、伝える練習をしなければ英語を勉強する意味がないと思うから。
・訪日旅行客が増え、海外の人たちと交流する機会が増えたから。
・英語を上達させるためには、「やり取り」することが必要だから。

事前と事後で数値が伸びたり、自由意見に「やり取り」という単語が多く使われたりするなど、授業で「やり取り」の活動を取り入れることで、一層生徒の意識が高まったと言える。

3　ルーブリックの活用について

＜意識調査結果＞
〔質問８〕事前に示したルーブリック（評価項目）は役に立ちましたか。
⇒各校とも、肯定的回答が８割程度の数値を示した。

本研究では、パフォーマンステストで使用するルーブリックの評価項目をやり取りの内容に絞り、文法や発音、イントネーションの正確さなどを含めなかった。また、生徒には単元の最初にルーブリックを示し、パフォーマンステストを実施することを伝えたため、生徒は日頃の授業の中で取り組むペアワークなどのスピーキング活動でも、ルーブリックの評価項目を意識することができた。

生徒の意識調査の自由記述欄には、「自分のスピーキング活動を振り返ることができた」や「他の生徒を評価することによって、ルーブリックに示された目標や規準を理解することができた。」という意見があった。

文法事項を含まないルーブリックとしたことに関しては、生徒からも「文法を気にしないで話すことができた」という声だけでなく、「文法事項も評価してほしい」という要望があるなど、様々な反応があった。

また、教師の意識にも大きな変容があり、ルーブリックを単元前に作成することによって、身に付けさせたい力が明確となった。このことで、ペアワークにおいて、形式的な会話にとどまるのではなく、目的をもってペアワークをさせることができるようになった。教師が、やり取りができるようになるためのペアワークを体系的に考えることにより、活動が活発になり、バリエーションも格段に増えた。

4　英語で「やり取り」することに対する抵抗感について

＜意識調査結果＞
〔質問 10〕英語で「やり取り」することに対する抵抗感（ハードル）は下がったと思いますか。
⇒各校、肯定的回答が 50%以上となり、２学期前半よりも２学期後半に意識調査を行った学校の方が、肯定的回答の割合が高かった。

２学期始めに授業を行った学校では、肯定的回答と否定的回答が約 50%ずつであった。２学期末に授業を行った学校では、14%の生徒が「思う」と回答し、55%の生徒が「まあ思う」と回答し肯定的回答が 70%弱となった。このことから、単発ではなく、指導を重ねていくことで、生徒の意識が徐々に変化していくことが読み取れると言える。生徒は、例文を覚え、穴埋め形式でやり取りをするところから練習を始め、設定された課題を達成するごとに、やり取りに対する消極的な意識を積極的な意識へと変えていったことが分かる。

５　パフォーマンステストをペアで行うことについて

＜意識調査結果＞

〔質問 11〕パフォーマンステストがペアになったことで、ペアワークの取組に対する意識は変わったと思いますか。

⇒各校とも肯定的回答が８割弱の数値を示した。

日頃の授業で行っているペアでの活動がそのままパフォーマンステストになることで、日頃の授業で行うペアワークなどのスピーキング活動に意欲的に取り組むことができ、パフォーマンステストでも高得点を獲得することができた。一方「思う」という回答より、「まあ思う」という回答が多いことから、今後一層、授業中の活動とパフォーマンステスト評価の関連性を高めていきたい。

６　４技能評価の充実

以下は、部員の所属校で２学期に行った期末考査及びパフォーマンステストの平均点の比較である。

	A	B	C	D	E	F	G	H
コミュニケーション英語Ⅰ　期末考査（満点 100 点）	68.4	62.6	67.0	61.8	69.1	67.7	65.1	62.3
パフォーマンステスト〔ペアでのやり取り〕（満点　10 点）	8.6	8.7	8.6	9.1	8.5	8.0	8.5	8.4

※　それぞれの満点は、コミュニケーション英語Ⅰの期末考査は 100 点、パフォーマンステストは 10 点である。

この表から、必ずしも期末考査の結果とパフォーマンステストの結果が一致しないケースがあった。４技能をバランスよく育成し評価していくためには、パフォーマンステストの実施が不可欠であり、４技能のうちの「話すこと（やり取り）」の力の育成には、授業中の活動に意欲をもたせ、積み重ねていくことが必要であることが改めて分かった。

Ⅶ　研究の課題

1　生徒の実態に応じたルーブリックの作成

本研究を通じて、生徒にやり取りに焦点を当てたルーブリックを作成、生徒に提示することで、生徒のやり取りに対する意識に変化が現れることが分かったが、同時に、個々の学校の実態に応じたルーブリックを作成することが非常に難しいことも明らかになった。検証授業１では、多くの生徒が数回の練習で目標を容易に達成し、結果として難易度の設定が低かったことが明らかになった。検証授業３では、「Grammatical error is NOT an evaluation point（英語で生徒同士がやり取りを行う際に、文法的な誤りは評価の対象にしない）」ということをルーブリックに記載して明示した。このことにより、生徒の多くが「英語を使って発言することに対しての心理的な抵抗感が低くなり、やり取りをより続けやすくなった。」と意識調査の結果に表れた一方で、「Me, too」でしのいでしまったり、単語のみでやり取りを行ったり、ジェスチャーで相手に伝えようとしたりする生徒が多かった。やり取りを続けようという意識や態度は十分に評価できるものの、会話を発展させるような力の育成という観点からすると課題が残ったと言える。

生徒の実態に応じたルーブリックの作成のため、単元後の評価を分析し、事例を蓄積していくことで、ルーブリックの一層の充実を図っていきたい。

2　パフォーマンステストの更なる工夫・改善

(1)　時間の確保

教師は指導時間を確保する必要もあり、パフォーマンステストの評価にかけられる時間は限られている。しかし、ルーブリックの活用が進むことで、自己評価及び生徒同士の評価が容易になり、生徒自身が伸長を実感することが期待できる。単元の指導計画の工夫などにより、適切なパフォーマンステストの時間設定について研究を進めていきたい。

(2)　評価の公平性の向上

ランダムでペアを組ませた生徒二人のやり取りを評価する上で、スピーキング力が大きく異なる場合に､相手が反応できずに会話が止まるなど評価しにくい状況が発生していた。相手の英語力に点数が左右されてしまい、公平性の担保が不十分であるという課題が残った。教師は、場面設定を行い生徒が話す内容をある程度制限をし、ペアの相手の影響が最小限になるよう配慮する必要がある。テストを絵やロールプレイカードで内容を工夫するなど更なる実践を蓄積し､生徒のやり取りの力を正確に評価する工夫を研究していきたい。

また、評価者にとって、やり取りを行う生徒二人を同時に評価することは容易なことではなく、評価の項目数を絞ったり、規準をより明確にしていったりする必要がある。

さらに、ALT や JET、日本人教師が同時にパフォーマンステストを実施し評価した場合、その評価にずれが生じていることもあった。パフォーマンステストを実施する際には、事前の評価規準についての打ち合わせに加え、生徒のやり取りのパターンを想定し実際に教師同士で実施してみるなどして、キャリブレーションを行い、評価者の中での擦り合わせを行う必要がある。この課題に関しても、実践例を蓄積していくことで、学校の実情に合った生徒それぞれの学習状況を正確に評価する工夫をしていくことができる。

３　題材の工夫と指導の改善

本研究では、「社会的な話題について、論理的にやり取りできる力の育成」という主題を設けた。このテーマで研究を進めていく上で、教科書の題材にある「社会的な話題」についてのやり取りを、帯活動等に落とし込んで繰り返し行うことで、やり取りの力の育成に一定の成果をみた。

しかし、教科書の社会的な話題をそれぞれの生徒の実態にあった活動にしていくことに、課題が残った。生徒によっては、そもそも扱っている話題に対しての基礎知識をもち合わせていないため、やり取りの活動をする以前に、そのテーマについて自分の意見をもつことが母語でも難しいという状況もあった。生徒の興味・関心や、既存知識等に応じて、教師が適切な場面設定や題材の工夫をすることが大切である。

また、どのような話の進め方が論理的なのかを生徒に理解させるのに時間を要したことも課題として挙げられる。やり取りの活動を導入・指導する際には、生徒が論理的に話すために必要な表現、生徒が意見を述べるに当たって考えを深める道標になるような指導の充実が大切である。こうした課題を踏まえ、さらに研究を深めていきたい。

平成 30 年度　教育研究員名簿

高等学校・外国語

学　校　名	職　名	氏　名
東京都立三田高等学校	主任教諭	山内　理央
東京都立小松川高等学校	主任教諭	◎桑波田　理恵
東京都立大島高等学校	教諭	山中　悠香
東京都立府中けやきの森学園	主任教諭	小暮　佳弘
東京都立南平高等学校	教諭	増永　優治
東京都立八王子拓真高等学校	教諭	○上　亮司
東京都立昭和高等学校	主任教諭	渋下　美香

◎　世話人　○　副世話人

〔担当〕東京都教育庁指導部指導企画課
指導主事　田中　春子

平成 30 年度

教育研究員研究報告書
高等学校・外国語

東京都教育委員会印刷物登録
平 成 30 年 度 第 135 号

平成 31 年３月発行

編集・発行　東京都教育庁指導部指導企画課
所　在　地　東京都新宿区西新宿二丁目８番１号
電話番号　（０３）５３２０―６８４９
印刷会社　康印刷株式会社

リサイクル適性Ⓐ
この印刷物は、印刷用の紙へリサイクルできます。